

「めぐりあう時間たち」

リチャード 「ミセス・ダロウエイ”君か？”

クラリツサ 「ええ、そうよ。私よ」

リチャード 「どうぞ」

クラリツサ 「リチャード、素晴らしい朝よ。光を入れましょう」

リチャード 「まだ、朝かい？」

クラリツサ 「ええ、そうよ」

リチャード 「僕は死んだのか？ おはよう」

クラリツサ 「お客は？」

リチャード 「来た」

クラリツサ 「今もいる？」

リチャード 「もう消えた」

クラリツサ 「どんな姿？」

リチャード 「今日の“客？” 黒い炎のよう。まばゆいと同時に暗い。電気クラゲ

もいた。歌ってたよ。たぶんギリシャ語で」

クラリツサ 「授賞式は五時からよ。覚えてる？」

リチャード 「……」

クラリツサ 「授賞式の後、うちでパーティ」

リチャード 「……」

クラリツサ 「朝食の配達は？」

リチャード 「届いたよ」

クラリツサ 「ちゃんと食べたの？」

リチャード 「見ればわかるだろ？ 朝食が置いてあるか？」

クラリツサ 「いいえ」

リチャード 「じゃ、食べたんだろ」

クラリツサ 「きつとそうね」

リチャード 「どうでもいい」

クラリツサ 「大事な問題よ。医者が言ってたでしょ。薬飲んでないの？」

リチャード 「耐えられない。人前で立派に振る舞うなど」

クラリツサ 「パフォーマンズじゃないのよ」

リチャード「パフォーマンスで賞を貰った。エイズになり、頭がおかしくなったのに生きているから」

クラリッサ「違うわ」

リチャード「病気だから受賞したんだ。健康でもくれるか？」

クラリッサ「もちろん、くれるわ」

リチャード「どこにある？」

クラリッサ「何が？」

リチャード「賞だよ。見たいんだ」

クラリッサ「まだ貰ってないわ。今夜よ」

リチャード「確かか？ 授賞式の記憶があるぞ。時間の感覚を失った」

クラリッサ「リチャード、パーティよ。たかがパーティ。あなたを尊敬し、賞賛す

る人だけが集まるの」

リチャード「小さなパーティか。選ばれた人だけ？」

クラリッサ「友だち」

リチャード「友だちはいない。みな僕に愛想を尽かした。“おお、ミセス・ダロウ

エイ。 静寂を覆い隠すためいつもパーティを開く”」

クラリッサ「リチャード、あなたは何もしなくていいの。姿を現してソファに座つ

てて。私がついているわ。みんなあなたの作品を永久に残ること喜んでい

る」

リチャード「僕の作品は永久に残るのか？ 行かない」

クラリッサ「なぜ、そんなことを……」

リチャード「無理だ」

クラリッサ「なぜ？」

リチャード「僕は書こうとした」

クラリッサ「何？」

リチャード「何もかも書きたかった。ある一瞬に起こるすべてを。君が腕に抱えた

花の様子。このタオルの匂い。織られた糸の感触。二人の気持ち。君と僕

の感情。遠い昔の僕たちの事。この世界のすべて。絡み合った記憶。今も

絡み合ったまま。でも書けなかった、何ひとつ。始まりに比べ、終りは虚

しすぎる。くだらないプライドのせいだ。それに愚かさ。僕は何もかも欲

しがる。そうだろ？」

クラリツサ 「確かにそうね」

リチャード 「海岸で僕は君にキスをした。覚えているかい？ もう遙か昔……」

クラリツサ 「もちろん」

リチャード 「あの時、何を望んだ？」

クラリツサ 「……」

リチャード 「もっとそばへ」

クラリツサ 「近くにいるわ」

リチャード 「もっと近くに……手を取って。怒るかい？」

クラリツサ 「パーティに来なかつたら？」

リチャード 「僕が死んだら」

クラリツサ 「死ぬ？」

リチャード 「パーティは誰のため？」

クラリツサ 「どういう意味？ 何が言いたいの？」

リチャード 「意味はないよ。ただ……僕は君を満足させるために生きている」

クラリツサ 「そうね。でもみんなそうだわ。お互いのために生きているのよ。医者

が言ってたでしょ？ ずっと生きられるわ、この状態で何年も」

リチャード 「たまらないよ」

クラリツサ 「許さない。死ぬのはイヤよ」

リチャード 「決めるのは君なのか？ 何年になる？ 何年ここに通ってる？ 君自

身の人生は？ サリーは？ 僕が死んだら考えないとならない。現実を見

る」

クラリツサ 「リチャード、気分が良ければパーティに来てくれるとうれしいわ。カ

ニ料理を作るつもりなのよ。興味はないでしょうけど」

リチャード 「あるとも、カニは大好物だ。クラリツサ」

クラリツサ 「なあに？ 三時半に来るわ。着替えを手伝いに」

リチャード 「すばらしい」

クラリツサ 「三時半よ」